



# 郷小だより

茅ヶ崎市立浜之郷小学校

2026年6月1日

6月号

校長 安倍 武雄

## 学校教育目標 ～支えあう・聴きあう・学びあう～

子どもたちが自分を再発見し、友だちを再発見し、学ぶことの価値と意味を再発見して「人生最高の6年間」を生み出す学校、そして、その営みを通して教師も親もともに育ちあう学びの共同体としての学校でありたい。

学校生活において、子ども同士のトラブルはあって当たり前です。保育園や幼稚園のような小規模の集団を多くの大人が見守る生活から、一クラス30人程度の生まれも育ちも違う子どもたちが一緒に大きな集団で過ごし、それを見守る担任は一人という生活に変わるからです。低学年に限らず、高学年でさえ感じ方の違い、価値観の相違などからすれ違うことはままあることです。子どもたちは学校という場で、そんな小さなトラブルを少しずつ乗り越えながら「社会の中で生きていく」ことを学んでいきます。それは、「世の中って「何もかもが自分の思い通りにならないんだなあ」ということを学んでいる」と言い換えてもいいでしょう。

たとえば、こんなことがあります。①「〇〇ちゃんと遊びたい」と思っても、〇〇ちゃんはほかの子と遊びたかったりします。②自分が「ブランコで遊びたい」と思っても、他の子が使っている場合だってあります。③周りの子が上手に絵を描いているのに自分だけうまくいかないこともあるでしょう。どんどん「嫌な思い」がたまっていきます。そしてその「嫌な思い」を子どもたちは間違った方法で表現します。①の場合、「〇〇ちゃんなんて大嫌い！」と言ってしまったり、②並んでいる子を押しつけて横入りをしてしまったり、③友達の絵にいたずら書きをしてしまったりのようになります。誰もが必ずしも上手に自分の本当の思いを表現できるとは限りません。育ちの早い遅いはいくらでもあることです。当然、「大嫌い」言われれば言われた子や横入りをされた子も、いたずら書きをされた子もまた「嫌な思い」をします。そして、①「友達やめる！」②さらに横入りを繰り返す③暴力に訴える、のように解決していこうとします。それが、トラブルの正体です。そして多くの場合、この例のように双方向的でありゼロ100で片方に原因がある場合は稀です。

だから、トラブルの訴えを聞いた私たちは、その子たちの互いの「本当の思い」は何だったのかを丁寧に聞き取り、相手の子に伝えることを繰り返します。そして、その対処法（「大嫌い!」「横入り」「いたずら書き」「さらに悪口で返す」「やり返す」「暴力に訴える」…）は間違っていて「してはいけない」ということ、双方に「こう言えば伝わるよ」ということを教えていくのです。

トラブルなんて無いに越したことはありません。誰もいい思いをしないのですから。しかし、全てに先回りをして子どもたちが「嫌な思い」をしないように用意周到な準備をすることはできません。子どもが転ぶからと言って道端の全ての石ころを片づけるわけにはいかないのです。本当に重要なのは、転ぶのを前もって防ぐのではなく、どうすれば転ばないで済むのか子ども自身が自ら判断できるようにしていくこと、万が一転んでしまっても自分の足で立ち上がり、自分自身でケガの対処ができるようにしていくこと、つまり上手な対処法を身に付けることなのです。

「悪口言われたの？ママがその子に文句言ってあげる」「もっとしっかりしなさい！そんなんだから、いつまでもやられるのよ」と子どもが自ら解決することを阻んだり、「あなたにも悪いところがあったんじゃない？」と子どもの話を聞かなかったりするのは、子どもに寄り添っているようで実は子どもの成長を邪魔していることとなります。

子どもは親や教師の分身でも所有物でもありません。自分の嫌な気持ちを表現し、相手の嫌な気持ちを想像できる子になってほしいと思います。そして、それらの対処してあげるのではなく、解決の方法を子どもと一緒に考えられる親であり、教師でありたいと思います。